

---

## 視力障害を有する後期高齢患者が在宅血液透析(HHD)へ移行し得た1例

---

医療法人衆和会 長崎腎クリニック 長崎腎病院

○永野かおり 田中 健 橋口純一郎 丸山祐子 原田孝司 船越 哲

### 【目的】

透析技術の進歩により後期高齢透析患者も増加しており、当院でも後期高齢者は全透析患者数の18.6%を占めている。自己穿刺は在宅血液透析のための必須条件であるが、今回後期高齢者で視力障害を有する患者への穿刺方法を検討し、HHDへ移行出来た症例を経験したので報告する。

### 【症例】

79歳女性、原疾患は糖尿病性腎症(インスリン使用中、視力は眼鏡矯正で0.2程度)

### 【結果】

今後の通院に対する不安とQOL向上を目的に本人がHHDを希望。しかし、視力障害があり。また低血糖による意識消失を繰り返しており、家族は反対していた。自己穿刺が可能となったら検討する条件で家族がHHDに同意し、穿刺練習を開始したものの、視力障害のため穿刺困難が続いていた。当院で独自に作成した『穿刺補助シート』で血管を固定し、刺入部と血管の走行を把握し、家族が誘導することで自己穿刺が可能となった。また本人が自己穿刺に意欲的に取り組む姿を見て、家族も協力的になりHHDへ移行に至った。

### 【考察】

HHDは頻回に施行でき、自宅での透析が可能な点から、高齢者に適した治療の1つと考える。視力障害があっても、本人の強い意思と介助者の理解、サポートが得られればHHDへ移行が可能であること再認識した。